



東西しらかわ小学校長会 広報部

第 17 号 令和8年 6月 17日

発行人 会 長 仁科 英俊

子どもの「変りたい」を支えるもの

東西しらかわ小学校長会長 仁科 英俊
(白河市立白河第一小学校校長)

色鮮やかな紫陽花が谷津川沿いを彩り、しっとりとした雨とともに、夏の訪れを感じる季節となりました。昨年度に引き続き、東西しらかわ小学校長会長という重責を担うことになりました。各学校の先生方、地域や保護者の皆様とともに、子どもたちの健やかな成長のためにがんばってまいりたいと考えています。どうぞよろしくお願い申し上げます。

さて、4月のスタートから早いもので2か月余りが過ぎました。この時期は、新しい環境への緊張がほどけ、子どもたちが「今の自分」を客観的に見つめ、一步を踏み出そうとする心の変化が目に見えて表れる時期でもあります。自分自身を新しく塗り替えようとする「変化の芽吹き」が、学校のあちらこちらで見受けられ、とても嬉しい気持ちになってきます。

最近、私の心に残った三つのエピソードを紹介させていただきます。

一つ目は、ある6年生の児童です。それまでは控えめで、自分から進んで前に出るタイプではありませんでしたが、最高学年になるという自覚がその子を突き動かし、5年生3学期には、6年生に感謝する会の実行委員長に自ら立候補したのです。「自分を変えたい」というその子の思いには強い覚悟が宿っていました。そして、6年生になってからは、委員会の委員長、そして体育会の応援団長にも立候補しました。体育会で声を張り上げ、下級生を鼓舞する姿は、言葉以上に多くのこ

とを周囲に伝えています。

二つ目は、これまで不規則な登校が続いていた児童の変化です。進級を機に、時間どおりに登校できる日が多くなり、自席で学習の準備を整え、学習に向き合う時間も増えてきています。何がその子を突き動かしただのか。それは、新しい環境の中で「自分もやればできる」という手応えと、これまでの一つ一つの積み重ねがあったからだと思っています。

そして三つ目は、学校に足が向くようになった児童の姿です。今年度、本校ではSSRを設置し、指導員を配置していただきました。この「居場所」で個別に対応できるようになったことで、その子は、短い時間ながらも、今ではほぼ毎日登校できるようになりました。小さな一歩ではありますが、その子にとっては未来につながる大きな変化です。

こうした子どもたちの「変りたい」という切実な一歩を支えるには、四つの大切な「土壌」が必要であると私は考えています。

第一に、教職員の温かな言葉がけです。過去にとらわれず、その子をしっかりと見取り、その子を信じる眼差しが勇気の源となります。

第二に、保護者の方々の励ましです。家庭という安心できる場所があるからこそ、子どもたちは挑戦に踏み出すことができます。

第三に、周囲の友達の認め合いです。「がんばっているね」「すごいね」と肯定し合える学級の空気こそが、変化を加速させます。

そして第四に、学びを支える「環境整備」です。SSRのように、一人一人の多様なニーズに応じた居場所や、そこに寄り添うことのできる「人」がいることは、子どもたちが再び歩みだすために不可欠な要素です。この第四の「環境整備」は、現場の努力だけでは限界があります。予算や人員の確保を含め、行政への積極的な働きかけを行うことも校長会の重要な使命の一つです。

私たちは往々にして、子どもたちを過去の印象で見てしまいがちです。しかし、子どもたちは今、この瞬間も自分自身の殻を破ろうとしています。変わろうと模索し、前を向く姿から、私たち大人が学ぶべきことは少なくありません。自らの意思で一步を踏み出す「主体性」こそが、予測困難な未来を切り拓く力になると思っています。

これまで出会った方々に支えられて

東西しらかわ小学校長会副会長 高木 徹
(西郷村立熊倉小学校長)

このたび、東西しらかわ小学校長会の副会長という大役をお引き受けすることとなり、その責任の重さをあらためて感じております。昨年度までは、総務として会員の皆様のご指導とご協力の下に何とか役目を果たすことができましたこと、感謝申し上げます。

小学校長会副会長として、広報誌の原稿をご依頼いただきました。改めてその肩書きを目にしたとき、いつの間にか自分もこうした役を務める年齢になったのだと、しみじみ感じました。日々の仕事に追われていると気づきにくいのですが、振り返れば教員として歩み始めてから今日に至るまで、多くの先輩方に導かれ、仲間に支えられ、子どもたちに育てられ、これまで経験を重ねてきた時間が確かに積み重なっているのだと実感いたします。

若い頃は、ただがむしゃらに子どもたちと向き合う私を、当時の校長先生をはじめ先輩方は、温かく見守り、時に導き、時に自由に挑戦させてくださいました。経験を重ねる中で、私は本当に多くの先輩方に恵まれてきました。節目ごとに出会った方々が、私に新しい役目や視点を与えてくださり、その一つ一つが今の私を形づくっています。自分の力で歩んできたつもりでも、実際には、誰かの支えや導きがあって初めて前に進むことができたのだと、年を重ねるほどに実感します。

そして今、校長として学校経営に携わり、子どもたちのよりよい学びのために日々判断を重ねています。その営みもまた、これまで出会ってきた多くの方々の教えや姿勢が、私の中に息づいているからこそ可能になっているのだと思います。

「自分がしていると思っけていても、結局は周りの人々の力でさせてもらっている」

この言葉が、最近ふと心に浮かびました。私を支えてくださった先輩方が、年々役職定年を迎えられ、私もあと2年となりました。これからは、自分が支えられてきたからこそ、今度は自分が誰かを支える番だと心して、これからも、東西しらかわ小学校長会の会員の皆様とともに、子どもたちの未来のために歩み続けたいと思います。

地域に開かれた大信小を目指して

白河市立大信小学校長 仁科 篤弘

令和7年度より大信地区が白河市地域学校協働活動事業の指定を受け、地域の良さを子どもたちが発見できるように取り組んでいます。昨年の7月より地域コーディネーターが配置され、地域の人材を活用して教育活動の充実と教員の多忙化解消に取り組んでいます。大信小学校に配置されたコーディネーターの方は、地域の方々との繋がりが深く、学校で要望した人材を適切に探してくださいました。特に学校として効果があった活動について二つ紹介します。

一つめは、5、6年生家庭科のミシンの指導です。担当教員だけでは、ミシンの使い方や調整などに手が足りないことが多く、毎回2、3名のボランティアの方々にお手伝いいただきスムーズに授業を進めることができました。

二つめは、マラソン記録会やなわとび記録会のサポートです。地域コーディネーターの方に走るコースでの安全確保や跳んだ数を数えるサポートなどを行っていただき、学校行事が安全かつスムーズに運営することができました。

大信小学校は統合して5年目になりますが祖母世代には、新しい学校ということでボランティアをするには敷居が高いところがあったようですが、地域コーディネーターの方に繋いでいただき、ボランティアの方々も子どもたちに関わることで充実感を感じることができたようです。子どもたちも地域の方と関わることで大信地区の良さに触れ愛情や誇りを持てるようになってきています。

また、大信地区には権太倉山の山開きやふると川まつり、大信文化祭、旧大屋小の桜ライトアップなど多様な行事やイベントがありますが、子どもたちが積極的に参加することで盛り上げることもできています。

今後とも地域と連携・協働しながら、子どもたちの学力向上の基盤づくりや社会性の育成を推進していきます。学校にとっても授業の充実や地域との信頼関係の醸成など、有効な部分がたくさんあるので大切にしていきたいと思います。



私のキャリアデザイン

伝統ある「学校山」とともに

西郷村立米小学校長 木戸美智子

校長職として4つ目の勤務地、米小学校。米小1年目で2か月が経ちました。4月には見えなかったことが少しは見えるようになり、解決すべき課題が積み重なっているのを感じています。解決に向けて考え行動しているつもりなのですが、なかなか「解決済み」とはならないのです。改めてこの職の難しさや責任の重さを感じています。

そのような私ですから、この「会員の声」の執筆にあたり、何を書いたものかと本気で困ってしまいました。締め切り日に重い腰を上げている始末です。どんな声を発すればよいのか・・・思いつくのは目の前の学校教育をめぐる課題ばかりで、考えていて自分で嫌になってしまいます。

個人的な話で申し訳ないのですが、少し前、姪が教職に就きたいと言いだした時に、姪の性格等を踏まえて「学校の厳しさを分かっている？自分の時間を犠牲にして働いている先生は多くいるけど、褒められることは滅多にないよ。批判されることが多くて、やる気のある先生ほど疲れ果てているのかも知れない・・・。中途半端な覚悟でやれる仕事ではないからね」と言ってしまいました。もちろんそれ以上に、得られる喜びや幸せ、自分の経験も伝えました。でも、自分が人生をかけてやってきた仕事を身内に大手を振って勧められないことに、心底落胆しました。

ここまで校長として、自分なりの全力で「学校における働き方改革」を推進してきましたが、教職をとりまく環境は依然として課題が多いのです。教員不足が象徴するように「選ばれない職業」となってしまった観もあります。深刻な問題です。

本校にも若手からベテランまで多くの教職員がいます。教職員人事評価制度等を活用しながら、それぞれのキャリアデザイン形成と実現のために助言をしているつもりですが、学校の在り方や教職員としての在り方・働き方が変わっていくだろうことを思うと、自分の錆びた感覚や経験からの「助言」でいいのだろうかと思うことしきりです。

退職年齢の引き上げにより、私も制度上65歳まで働けるようになりました。現在それをポジティブに捉えるマインドトレーニング中です。自分の働き方にもしっかり向き合っていきたいです。

白河市立小野田小学校長 須田 智美

小野田小学校は、今年で創立152周年を迎えました。校長室に並ぶ歴代の校長先生方の写真の中には、かつてお世話になった先輩の姿もあります。新任校長として本校への赴任が決まった際、その先輩から「小野田小学校はいいところだよ。地域も保護者も理解があつて校舎も綺麗。何てったって校長室から見える風景が最高なんだから。いいなあ、新任地が小野田で。」と温かい励ましのお言葉をいただきました。

その言葉のとおり、本校は、豊かな自然環境に恵まれ、地域と保護者、教職員が手を携えて子どもたちの教育活動を展開しております。今年度も朝の学習タイムや読み聞かせ、栽培活動など多くの場面で地域ボランティアの皆様に教育補助としてお力を貸していただいています。その集大成として毎年6年生が学校周辺で採れる楮(こうぞ)を原料とした「手漉き和紙」で、自らの卒業証書を伝統の手法で作成しています。

また、本校の「強み」は小規模校の特性を活かした全学年による一体的な取り組みです。異学年交流を目的とした縦割り「フレンド班」活動は、行事や給食、学習など年間を通じてあらゆる場面で取り入れています。上学年が下学年の手本となり、支える経験をとおして、子どもたちの自己肯定感や自己有用感を育んでいます。さらに、今年度の運動会から、個人種目の全児童に入賞ワッペンと点数を与える試みを始めました。これにより最後までやり遂げる心と達成感を得られるようにしました。秋には、全学年が栽培した野菜を「収穫祭」で調理し、日頃お世話になっている地域の方や保護者の皆様とともに味わうほか、収穫した餅米を児童が販売し、感謝の心や郷土愛を実体験から学びます。

本校の校歌には「学校山」という言葉があります。学校がそびえ立つ「学校山」に毎日登るように、一步一步諦めずに学び、成長し続ける子どもの姿を謳ったものです。こうした輝く姿をホームページや学校だよりをとおして発信し、地域や保護者から愛される学校づくりに邁進してまいります。今後とも、皆様のご指導、ご鞭撻の程よろしくお願い申し上げます。

「Frontier Spirit (開拓の精神)」を胸に

あやめのように清らかに

西郷村立川谷小学校長 齋藤 敬一

「校長先生、川谷にはいろんな子どもがいるだろうけど、よろしくお願いします。この地区には大切な学校なんです。」校長として赴任した4月、地域の方から言われた最初の言葉です。この言葉の意味をかみしめながら校長職が始まりました。

川谷小学校は西郷村の北西部に位置し、那須甲子の麓にある学校です。元々は戦後人々が移り住んでこの川谷地区を開拓したことが起源となり、現在に至ります。「Frontier Spirit (開拓の精神)」がこの川谷地区には宿っています。

本校は平成21年度より「村の特認校」として位置付けられ、今年度は全校生30名のうち約7割の児童は「少人数での教育を受けさせたい」等の願いから、村内の各地区から通学しています。子どもたちは大変素直で、何事にも一生懸命取り組んでいます。学級は完全複式のため、異学年同士での編制となっています。そのため、子どもたちは普段から上の学年の児童が下の学年の児童の面倒を見ることが当たり前のように学校生活を送っています。子どもたちが互いに学び合ったり支え合ったりする光景を目にすると、大変微笑ましく、清々しい気持ちになります。

また、本校の素晴らしさを感じたことの一つに地域の温かさがあります。敷地内の草刈りや子どもたちの野菜作りのための畑の提供など、学校や子どもたちのためにたくさんの協力をいただいています。4月の学校運営協議会においても本校の発展のため、そして先生方の働き方改革のために多くの建設的な意見をいただくなど、地域の方々の学校への期待や情熱を日々肌で感じています。

本校では「多様性と調和を重視した誰一人取り残さない教育の推進」を柱に、本校ならではの少人数を生かした教育、9年間での子どもの学びと育ちをつなぐ小中連携教育の実践、地域との連携協働による取組など、授業や多くの行事・体験活動等をとおして「未来を創る子どもの育成」に向けて、教育活動を推進しています。

今後も校長として川谷地区に宿る「Frontier Spirit (開拓の精神)」を胸に、川谷小学校をさらに発展させていけるよう精進して参ります。ご指導、ご鞭撻の程よろしくお願いいたします。

中島村立吉子川小学校長 戸倉深希子

吉子川小学校が運動会を迎える頃、あやめが満開になりました。「あやめタイム」という全校集会の時「学校の校章にも使われている花は何でしょうか？」という質問に、2年生から6年生が大きな声で「あやめ!」と答えました。1年生の「何?何?」という疑問の顔に「大丈夫!咲くから!」という声が聞こえた時は、思わずほっこりと笑みをこぼしてしまいました。そればかりではなく、先輩たちは教育目標もすらすら言えます。それにも驚きでした。

あ…あかるく たくましい子ども

や…やさしく おもいやりのある子ども

め…めあてをもって がんばる子ども

これには、背筋がぴんと伸びました。「こんなに学校をよく知っている子どもたちのためにまごまごしているわけにはいかない。がんばらなくちゃ!」ともう一度、自分に活を入れました。

そして、もう一つ、私自身が大切にしたいと考えているのは「あやめのように清らか」と教育目標に入っているフレーズです。あやめの花言葉は色によって違うのだそうですが、「大きな志」「知恵」「友情」と私たちが大切にしたい思いが込められています。そして、何より「清らか」と表現したところに意味があると考えています。私が目指すリーダーの姿はサーバント。「清らか」にはほど遠く、むしろ「清らか」の対極にあるような私ですが、シンボルのあやめに一步でも近づける学校経営を目指していきたいと思っています。

あやめが雨に当たったあと、「校長先生、なんとかして!!」と子どもたちがやってきました。何かと思ったら、「雨に当たって、あやめが折れちゃったよ〜。これじゃ、咲かない!」優しい心に後押しされて、応急処置をしました。あやめの生命力はとても力強く、すでに首をもたげて花を咲かせようとしていました。「みんなもあやめに負けないように強く大きくなってほしいな…」と願いを込めました。「あやめのように清らか」な子どもたちに育つように1日1日を大切にみんなで支援していきます。

応急処置で支え合うあやめ→



地域とともに歩む

矢吹町立三神小学校長 小池 薫

令和8年4月1日、三神小学校に着任しました。初めての県南地区勤務ということと、校長昇任というタイミングでしたので、全てが初めてのことばかりで不安でいっぱいでした。町役場でサービスの宣誓を行い出勤すると、教職員みなさんがあたたかく迎えてくださり、不安な気持ちが和らぎました。三神小学校の子どもたちは、豊かな自然に囲まれた環境の中で、伸び伸びと学校生活を送っています。また、三神地区の皆さまは、学校の教育活動にとっても協力的で、子どもたちに寄り添ってくださいます。毎朝の登校時には、多くの見守り隊の方が安全に登校できるように子どもたちと一緒に歩いてくださり、初めてその様子を見たときには驚きと同時に感謝の気持ちでいっぱいになりました。

三神小学校には、『三神小学校五心』というものが

三神小学校五心

「わたくしがします」という 奉仕の心	「おかげさまで」という 謙虚な心	「すみません」という 反省の心	「ありがとう」という 感謝の心	「はい」という 素直な心
-----------------------	---------------------	--------------------	--------------------	-----------------

があります。先輩方から引き継がれているとても大切な「五つの心」です。日々の教育活動の中で、子どもたちは様々なことを学んだり体験したりしますが、その一つ一つに『三神小五心』が関わってくると考えます。学校生活の中では誰か

と常に関わります。たくさんの人に支えられて学校生活を送っています。誰かのために行動することも多くあります。そんな様々な場面で子どもたちが自然に『三神小五心』を体現できるようその大切さを伝えていきたいと思えます。『三神小五心』は私が子どものころから言われてきていることそのものです。令和の時代になった今でも、この先もずっと大切にしていかなければいけないと感じました。

これからも三神小学校で引き継がれている『三神小五心』を大切に、教職員と力を合わせ、地域と共に「チーム三神」で子どもたちのより良い成長のため、教育活動に取り組んでいきます。

守成発展～次代を見据え、一歩前へ～

泉崎村立泉崎第一小学校長 根本 義浩

「お帰りなさい。」「待ってたよ。」この言葉とともに、教頭として勤務していた泉崎第一小学校へ6年ぶりに赴任した私を、泉崎一小の教職員や保護者、教育委員会をはじめとした地域の皆様が温かく迎えてくださいました。その温かさをあらためて実感するとともに、校長としての責任の重さに身の引き締まる思いがしました。

この5年間、学校を取り巻く環境は大きく変わりました。感染症の対応に始まり、少子化による児童数の減少、いじめや不登校等の問題の深刻化に加え、教職員の働き方改革等により、学校行事や教育活動の見直しが急速に進められてきました。6年ぶりに戻った泉崎第一小学校が、どのように変化しているのか楽しみであると同時に、不安もありました。

職員室には大型モニターが設置され、校長室の机やソファの配置も変わっていました。しかし、その一方で、変わらない確かな教育が受け継がれていました。2019年に村内の幼稚園、小学校2校、中学校の3校1園の教職員・保護者が熟議し、当時の児童生徒とも協議し制定した「泉崎っ子宣言」が校長室や職員室、各教室に掲示され、めざすべき姿として受け継がれていたのです。

「泉崎っ子宣言」

- (い) いつも元気に笑顔であいさつします！
- (ず) ずっとみんなで仲良く助け合います！
- (み) 自ら学びよく考えます！
- (ぞ) 最後まであきらめないでがんばります！
- (き) 絆を深めふるさとを大切にします！

朝の登校時には、集団登校の中で上級生が下級生の歩調に合わせながら歩き、元気なあいさつをしています。横断歩道では、止まってくださったドライバーの方へ、班長が深々とお辞儀をする姿も見られます。また、この登校を村の老人クラブ等で組織された「スクラム応援隊」「孫を見守り隊」の皆様が、温かく見守ってくださっています。

私は校長として、地域との連携を大切にしながら「子ども達の成長とともに喜び合える」地域とともにある学校づくりをめざし、自校のよさを守り、さらに発展させ継承していけるよう「チーム泉崎一小」で取り組んでいきます。

ご指導よろしくお願い申し上げます。

「～未来は向こうから来るものではなく、こちらから創るもの～」

矢祭町立矢祭小学校長 角田 修

矢祭小学校は平成28年4月1日に開校し、今年度4月1日でちょうど10周年を迎えました。11年目の新たなスタートをきる4月1日の着任時、身が引き締まる思いとともに、これから始まる学校生活への大きな期待を抱きました。本校では「子ども司書講座」や矢祭町版ラーケーションである「ファミラーション」を導入しており、他校にはない先進的な実践にふれるのも楽しみでした。

本校の誇れるものの一つに校歌があります。いわき市出身の世界的指揮者である小林研一郎先生が作詞・作曲を手がけ、「～未来は向こうから来るものではなく、こちらから創るもの～」と力強いサブタイトルが添えられており、躍動感あるメロディが大きな特徴です。また「遙かな空 広がる宇宙 遠くの未来を 見つめよう」と、歌詞に「宇宙」が入っているのも珍しいのではないかと思います。そして、自然豊かなふるさと矢祭を大切にしながら、広い視野をもち、大きな夢や希望を描いて、たくましく歩んでほしいという、保護者、地域、教師の思いを見事なまでに表現した唯一無二の校歌であると誇りに思っています。

校歌以外にも、素直で前向きな子どもたち、やる気と向上心に満ちあふれた教職員、協力的な保護者、地域の教育力と、ここ数か月で矢祭小学校や矢祭町のよさや誇れるものを痛切に感じています。また、東館小学校、下関河内小学校、関岡小学校、内川小学校、石井小学校の5校の歴史を継承しながら統合に至った多大な御苦労も、様々な機会にうかがっており、矢祭小学校の担う役割が大きいことを実感しております。これまでの歴史、先輩方や地域の皆様方の思いを大切にしながら、校歌のサブタイトルである「～未来は向こうから来るものではなく、こちらから創るもの～」を私自身が校長として肝に銘じ、教育委員会の皆様の御指導のもと、日々の職務に精一杯取り組んでまいります。そして、校歌にあるように、子どもたち一人一人が「遠くの未来」を見つめることのできる、笑顔の絶えない矢祭小学校を創り上げていきたいと思ひます。今後とも御指導のほどよろしくお願いいたします。

地域とともに

鮫川村立鮫川小学校長 丹内 哲史

南会津にて新任校長として2年間勤務した後、この度、初めて鮫川村でお世話になることになりました。現在は私自身も鮫川村民の一員となり、日々の生活をスタートさせております。

本校は明治12年に西野小学校分校として創立され、昭和22年に現在の「鮫川小学校」へと改称いたしました。その後、平成15年に渡瀬、富田、西野、西山、鮫川の5校が統合、さらに平成30年には青生野小学校との統合を経て現在に至ります。校長室の印鑑マットに刻まれた「青生野小」の文字をはじめ、校内のあちこちに歴史を紡いできた統合の足跡が息づいています。

令和8年度の鮫川小学校は、全校児童91名で元気にスタートいたしました。本校では教育目標に「心身ともに健康で 豊かな人間性と創造性に 富み たくましい実践力のある児童の育成」を掲げております。子どもたちは非常に元気で、素直な心をもった子ばかりです。

4月24日に、縦割り班で地域の景勝地である館山公園へと赴く「なかよし遠足」を実施いたしました。現地では「1年生を迎える会」や宝探し、班ごとのゲームなどを楽しみました。6年生が優しくリードしてくれたおかげで、入学以来緊張の日々を過ごしていた1年生も、すっかり安心して縦割り班の仲間入りを果たすことができました。

また、5月に行った PTA 奉仕作業では、当日都合がつかないからと、事前に作業を進めてくださる方が大勢いらっしゃったことに深い感銘を受けました。「学校を第一に支えよう」という温かい地域性を肌で感じた次第です。私たち教職員一同、こうした保護者や地域の皆様の思いに、確かな教育活動をもって応えていかなければならないと決意を新たにしています。

本校は令和11年度に小中一貫校としての新たな一歩を踏み出す予定です。時代が変わろうとも「地域に根ざした学校」の本質は変わらないと思ひます。これからも保護者や地域の皆様の期待と信頼に応えられる学校づくりに、全力を尽くしてまいります。

